

カマエの成立についての覚書

松岡 心平

現代の能の身体の基本は、カマエとハコビにある。

観世寿夫は、『心より心に伝ふる花』（白水社）で、「能、殊に夢幻能においては、演者はあの吹き抜けの舞台上で、一人の生身の肉体であることを超越してそこに居たい」と言い、「ただ立っているだけで一つの宇宙を象りうる存在感」をいかにして持つかを問い、「舞台上、立っているということは、能の場合、前後左右から無限に引つ張られているその均衡の中に立つということなのだ。逆に言えば前後左右に無限に力を発して立つ。無限に空間を見、しかも掌握する。それがカマエである」と述べる。カマエとは、具体的には「腰の蝶番のところ」に緊張を集めて立つこととであり、こうして「一本の線のように抽象化された歩きかた」すなわちハコビが可能になる。能のスリ足のハコビは、カマエという身体の構え方と不可分であり、むしろ腰を据えるカマエが産み出した歩きかたであろう。

この、舞台上に宇宙の中心軸として立つための、カマエという身体技法は、いつ、どのようなにして工夫されたのだろうか。

「遊楽万曲の花種をなすは、一身感力の心根也」（『遊楽習道風見』）と言ひ、「油断なく心をつなぐ性根」による「内心の感」が「外に匂ひて面白き」（『花鏡』）と言ふ世阿弥にあって、意識が内部集中していくという身体のあり方が、能役者の新しい身体のあり方として自覚されていたことは確かだろう。しかし、世阿弥が成し遂げたのは、物真似の種々の類型を、老・女・軍の三体にまとめ上げるところまでであり、三体のさらに奥に置かれるべき、カマエという、意識の内部集中を可能にする究極の身体は、未だ発見されてはいなかった。

カマエの発見は、後代の能役者たちの工夫の賜物であろうが、その萌芽と見られるものは、既に、室町末期成立の『八帖本花伝書』に見出される。

『八帖本花伝書』巻五には、『二曲三体系図』に做つたような一連の裸絵図が載り、その二番目の図で、男が正面を向いた恰好は、現在のカマエにきわめて近い。

『八帖本花伝書』（以下の引用は日本思想大系本）は、体の作り方を「胴作り」と表現するが、二番目の図の男の「胴作り」は、「腰据へてよし。拍子踏む時腰ふらめかず。身形定り、また、腕・首折れ候はぬやうに」膝少折てよし。弓の胴作りの心持也。膝、腰に心持なくては、身形据らぬ物也」「肘の持やう。身より二寸程開く。但、鬼の能は、三寸程身よりのけてよく候なり」（顔、肩、胸については省略）であり、「此胴作りにては、身形よく、拍子踏みよく、腰据り、足もと定、尤に候」とある。

巻五の一連の裸絵図では、最初の図が「胴作りせざる人形」であり、三番目の図が「此人形（二番目の人形）と同じ胴作り。但、側に見せたる絵図」であるから、冒頭で三つの図を費やして、男性役の「胴作り」を説明していることになる。この体の作り方の重要性が窺われよう。

しかし、それはすべての風体には及ぼされるべき「胴作り」ではない。例えば、十番目の、左手に笹を持つ女の裸絵図には、「百万」の胴作り、其外、女物狂の身形、かくのごと

し。いかにも引纏はず、腰据へず、膝も定めず、身形を繕はぬ所、物狂の本意也」との説明が付いており、少なくとも狂女物では、未だ物真似的な体の作り方がなされているのである。

カマエは、室町末期頃までに、まず、男性役の体の作り方として定着した後、演能時間が現代とほぼ等しくなった江戸後期頃までには（岩波講座『能・狂言』I「能時間の推移」参照）、狂女物等の女体までも含めた一般的な体の作り方として成立していた、と一応考えておきたい。

因みに、『わらんべ草』（江戸初期）での狂言方大蔵虎明の「心は腰に有と言」「腰すはらねば弱く見ゆる」といった発言も、カマエが一般化してゆく過程に置いて考えることができよう。

能のスリ足の源流については、呪師走りや宮廷の練足などを想定する説もあるが、カマエとハコビを一体と考えるとき、もう一つの可能性として浮上するのは武道であろう。

『禪鳳雑談』（室町後期）に耳よりな一節がある。「兵法と鞠が能に近く候か」と言う金春禪鳳は、兵法の稽古について、「兵法稽古候に、長袴に腰を据多などして、笠負うて、刺し合いの、刀法のと申し候。これが稽古にて候。まことの時、その用にて斬られ候はず

候」と述べている。

表章氏の「能楽と武道」三（日本武道館刊『武道』、昭和51年3月号）によれば、慶長六年（一六〇一）二月に柳生但馬入道宗厳（石舟斎）が金春七郎氏勝（禪鳳のひ孫）に与えた『新陰流兵法目録事』でも、刀法の解説図は長袴姿が主体、とのことである。

「足さばきの妨げになる長袴を着用しての稽古は、不自由な姿で稽古すること」（同論文）であるが、より積極的には、腰を据え、スリ足で動くことの徹底した訓練と考えられよう。

禪鳳以来、金春家代々には武芸の嗜みがあったようである。この中から、柳生石舟斎から兵法の極意を授けられる金春氏勝のような武芸者が出たのである。金春家のみならず、室町時代の一線級の能役者が武士に近い存在であったことも忘れてはなるまい。

禪をモデルとする精神集中というあり方において、兵法と能は近く、武芸者と能役者の実際の交流の中で、兵法の身体の能の身体へとしてのカマエが成立していったのではなからうか。

（東京大学文学部専任講師）